

基調講演

ゲンパツと立正安国

三原正資

日本の近代とは

この図は、国土交通省国土計画局が作成した「日本の総人口の長期的トレンド」を示したグラフです。『人口減少社会という希望』（二〇一三年 朝日新聞出版）という本では、このグラフを次のように説明しています。

これを見ると、江戸時代後半の人口は三〇〇〇万人強でほぼ安定していたが、明治維新以降、あたかも線が直立するほどに急激に人口増加が起り、第二次大戦後に七〇〇〇万人強であった後も同様の急勾配の増加が続いたことがわかる。

そして、このグラフから、次のように考えることができると述べています。

それは、明治以降の私たち日本人が、いかに相당한「無理」をしてきたか…

江戸末期に黒船が訪れ、かつその背後にある欧米列強の軍事力を目の当りにし、…ショックから、体に鞭打ってすべてを総動員し、文字通り「拡大・成長」の坂道を登り続けてきた。…（敗戦）後も、あたかも「戦争勝利」が「経済成長」という目標に代っただけで、基本的な心のもちようは同じまま、上昇の急な坂道を登り続けたのであ

る。：無理に無理を重ねてきたその矛盾や、疲労が、様々の形の社会問題となって現れている…。

私も同じように考えます。そして、そのシンボルが三・一一、すなわち東北大震災の渦中におこった福島第一原発の事故ではないでしょうか。

二〇〇四年から、一転、人口減少社会に入りました。今、有史以来の未体験ゾーンに、生きているのです。この一五〇年間、多くの自然災害、内乱、いくたびかの戦争をくり返しながら、無理に無理を重ねた。拡大・成長体制、それを支えた私たちの「基本的な心のもちよう」をかえりみるべき時ではないでしょうか。

今回、私は、*「拡大・成長」*を続けた日本の歴史を象徴する場所へと行きました。その場所に立つて考えたことを報告したいと思います。

防衛大学校

この七月に、映画「終戦のエンペラー」が封切られました。アメリカを主力とする連合国（国際連合 United Nations）による日本占領と天皇の戦争責任の追求、それは「戦後」という神話の始まりを描いたものです。皇居の向い側にある現在の第一生命ビルにあったGHQ連合軍総司令部は「天皇の軍隊」であった帝国陸・海軍を解体しました。

しかし、戦後の「冷戦」、朝鮮戦争のほつ発とともに、自衛隊が生まれました。昭和二十七年に設置され、二年後に現在の校名となった防衛大学校は「将来陸上・海上・航空各自衛隊の幹部自衛官となるべき者の教育訓練をつかさどるとともにそれらに必要な研究を行う防衛省の施設等機関です」と説明されています。

本宗の教師であり、当研究所嘱託である野村佳正師は、防衛大学校教授に就任されていますから、案内していただきました。自衛隊をめぐる種々の問題がありますが、深い関心を持つ必要があると考え、訪問しました。

写真は防衛大学校本部庁舎、校舎前に展示してある戦車（特車）、一六〇〇余名の防大生が昼食後、各教室へと向う日課の「課業行進」の様子です。

記念艦三笠

防衛大学校を後にして、「記念艦三笠」へ行きました。

戦前の日本は日本帝国八〇年の歴史で、もっとも輝かしいモニュメントではないでしょうか。東洋の小国がロシア帝国に勝利した日露戦争、この戦争の勝敗を決した戦いが、東郷平八郎率いる日本海軍がバルチック艦隊を破った日本海海戦（明治三八年）です。戦艦三笠は東郷長官がのった旗艦でした。

小説家司馬遼太郎の『坂の上の雲』では、日本海海戦の記述が小説中もっとも盛り上った部分です。

大日本帝国八〇年の頂点こそ、この日露戦争の勝利であり、この後、おごりたかぶったわが国は、坂の上の雲とは反対に四〇年後の敗戦へと向かって坂道をかけおりていくのでした。

戦前の日本人にとって、日露戦争の勝利こそは、民族の偉大さを証明する叙事詩でした。エピソードを紹介したいと思います。敗戦から一〇年余のちの昭和三四年、私は小学四年生で学級担任はK先生でした。K先生はシベリア抑留生活の話をして下さいました。帝国陸軍の将校だったのでした。K先生が一〇歳の私たちに一番話して下さいたのが日露戦争のことでした。二〇三高地の作戦のことなど、今でも覚えています。K先生にとって、日露戦争に勝利したことは、ご自身の誇りだったのでしょう。このあと、教育の場から、このような先生は次第に姿を消していったように思います。善きにつけ、悪きにつけ、歴史とは、教育の場で、私たちの心の中に創られていくものようです。記念艦三笠の写真です。

アメリカ海軍横須賀基地

記念艦三笠から歩いて、アメリカ海軍横須賀基地へ入りました。許可証の発行になかなか時間がかかりました。後日、このことを京浜教区檀信徒研修道場が開催された横須賀市大明寺で楠山泰道住職に話すと、「昔はベースに簡単に入れたものだがな」と仰っていました。地元では「ベース」と呼ばれて、当日はどぶいた通りには米兵がたくさんいました。

ゲートを入ると、「アメリカ」でした。事実、一応、パスポートを携帯していました。米海軍基地司令官オフィスの前を通り、生活区域へと入りました。道路には、ニミッツ大通り、とかサンディエゴ通りという標識がつけられ、ゆっくりと走る車のナンバープレートには数字の前にYがつけられています。

私たちが横断歩道にさしかかると、車は私たちの様子をうかがっていたかのように停止します。通りを自転車で走る黒人兵の軽快な姿、海へカヌーを入れようと準備する金髪の若者たち、アメリカ文化の香りです。しばらく歩くといく艘かのヨットが帆を休めていました。すっと伸びた帆柱の向こうには戦艦三笠が鎮座し、その彼方には防衛大の給水塔が見えました。そしてヨットの手前にはグリーン・ベイと書かれた標識がありました。まさにアメリカのグリーン湾に拿捕されている、戦前の日本の栄光の象徴「三笠」といった風情でした。これほど、一九四五年の日本の敗戦という歴史的事実を語るものはないような気がしました。この事実をどうとらえ、どう歩むのか、大変なことです。写真は、米海軍基地司令官オフィス、海軍基地内道路、食品販売店、グリーン湾と記念艦三笠、です。

恐山

五月半ば、青森県下北半島の恐山^{おそれざん}、六ヶ所村へ行きました。恐山は気温七℃でした。恐山は曹洞宗の寺院です。南

直哉師の『恐山』という本に、恐山の様子が記されています。

ゴツゴツとした岩がむき出しのままいくつかの丘をなし、その裂け目からはモクモクと煙が噴き出している。あたりはガスに包まれ、硫黄の匂いがツンと鼻を刺す。丘の上から南西に目を移せば、そこには湖があり、青く美しい湖面が広がっている。岸の砂浜には小石が積み上げられ、大量の風車が山上の冷たい風に吹かれて、カラカラと音を立てながら回っている。

恐山は死者の集まる霊場です。この日も、何台ものバスに乗って参拝客が訪れていました。三・一一以後は、とくに被災地からのお参りが多いと、ガイドさんは話していました。エゾツツジの群生する丘の上でカラカラと回る風車。地藏堂の内部に山と供えられた、死者のための服、靴、杖、はきもの。本堂内に供えられた、若くして未婚のまま亡くなった死者にたむけられた花婿人形と花嫁人形。これは冥界婚と呼ばれています。恐山には、人びとのむき出しの死者への思いが溢れ、圧倒されそうになります。

宗教の近代化の果てに、ここ三〇年間余の葬儀のあり方の変遷をみても、死と死者、そして仏教は社会のシステムに囲われ、透明化してしまつたようです。かつては確かに存在した死者を取りかこむ闇と恐れのおいは、どこに消えたのでしょうか。「葬式離れ」は、その当然の結果ではないでしょうか。

写真は、恐山の山門、荒涼とした境内、そしてカラカラ回る風車です。

六ヶ所村

五月一五日、荒涼とした下北半島の風景を眺めながら六ヶ所村へ向かいました。昨年、六ヶ所村文化交流プラザで開催された世界的ピアノスト、イーヴォ・ポゴレリチの演奏会に行った時の、六ヶ所村の印象を、音楽評論家鈴木淳文氏は次のように書いています。

初めて訪れた六ヶ所村は、なかなか刺激に満ちた場所だった。燦然とそびえ立つ原燃PRセンター：村立郷土館：東ドイツを思わせるアパート群や風車が乱立する風景もおよそ日本離れしており、森のなかに広がる石油備蓄基地は宇宙人の秘密基地のようで、夜になれば、暗闇のなかで街灯が一齐に青い光を煌々と灯すのだ。〔芸術新潮〕二〇一二年七月号）

私の見た六ヶ所村の印象もこの通りで、周囲も含めて、長野県の軽井沢や八ヶ岳周辺かと錯覚するようでした。一帯の施設を所有するのは日本原燃株式会社。パンフレットには事業目的が示されています。

1 ウランの濃縮

2 原子力発電所等から生ずる使用済燃料の再処理

3 前記2に関する海外再処理に伴う回収燃料物質および廃棄物一時保管

4 低レベル放射性廃棄物の埋設（以下略）

株主構成は全国九電力各社、日本原子力発電（株）、その他七七社。この六ヶ所村の日本原燃株式会社は、全国一七ヶ所五〇基の原発の核燃料の製造と回収された使用済高濃度放射性廃棄物を保管する、いわば兵站の役割を荷う原子力産業の中核です。

六ヶ所村を車で移動中、上部に鉄条網を付けた二重の壁が道路沿いに延々と続いています。内部にはウラン濃縮工場、使用済核燃料再処理工場、高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター、低レベル放射性廃棄物埋設センターがあります。

この施設を所有するのは、資本金四、〇〇〇億円の日本原燃株式会社（JNFL Japan Nuclear Fuel Limited）です。パンフレットには副社長以上の五人の役員の名前が記され、取締役会長は八月の時点で、日本で唯一、大飯原発を稼働させている関西電力社長八木誠氏です。利潤を追求せざるをえない企業が、行き場のない高レベル放射性廃

棄物を封入形成したガラス固化体二、八八〇本と、最終的には約三〇〇万本になる低レベル放射性廃棄物を超歴史的な長期間、はたして保管できるのでしょうか。

この感を深くしたのは、青森県三内丸山遺跡と秋田県大湯環状列石という二ヶ所の縄文遺跡に立ったときです。四〇〇〇〜五〇〇〇年前の遺跡です。私は、五〇〇〇年という時の流れさえも実感できませんでした。一ヶタ上の数万年、はたして一企業が安全に保管できるのでしょうか。

小説『震える牛』（小学館 二〇一二年）の作者相場秀雄氏は次のように述べています。

二十世紀の特徴が全体主義体制との闘いであつたとすれば、二十一世紀の特徴は行き過ぎた企業権力をそぐための闘いになるだろう。

また、内田樹氏も『脱グローバル論』の中で次のように述べています。

今問題なのは：コーポラティズム（大企業による社会支配）だろうと。つまり、企業が、その権力を背景にして政治や自治だとか、あるいは国民経済なんかを金で操つる：

さらに、トップセールスと称して安倍首相は原発輸出の前提となる原子力協定をベトナム、ヨルダン、トルコ、アラブ首長国連邦との間で締結ないし署名済みであり、インド、ブラジル、南アフリカなどとも交渉中です。原発事故や使用済核燃料処理の問題はグローバル化し、文字通り「核拡散」しつつあるのが、現代世界の大きな課題です。写真は六ヶ所村の集合住宅、施設の防護柵、廃棄物を封入したカン、そして二ヶ所の縄文遺跡です。

川内原発、そして水俣

六月十二日、川内原発へいきました。行く途中は、山、又山。周囲には美しい田が広がり、田植えはほぼ終わっていました。

川内原発は昭和三九年（一九六四）、川内市議会誘致決議。昭和五九年（一九八四）、一号機、翌年、二号機が運転を開始、出力は各々八九万キロワット、九州では玄海原発に次ぐ二番目の発電所です。向かいの展示館には実物大原子炉模型、一次冷却水管、燃料集合体等がたいへん分かり易く展示されていました。

ただいずれの展示館でも同様でしたが、係員の説明の中では、自然界には放射線は多く存在し、無害であるという説明には、違和感をもりました。私たちが危機感をもっているのは、メルtdownした福島第一原発の放射性物質であり、各地の原発が大量に保管している使用済燃料、そして高濃度放射性廃棄物です。これらの放射線による被曝が無害であるわけではないのです。

かつての被曝により突然白血病を発症することを、現在の広島や長崎の被曝者は、「時限爆弾」にたとえたり、「原子爆弾が私の体の中にある」と表現しています。折り鶴で知られた広島の被曝者佐々木禎子さんは、二歳の時に被曝し、一〇年たった一二歳の時に突然白血病を発症したのでした。八月六日の夜のNHK「終わりなき被曝との闘い」は、六八年後の白血病発症を伝えていました。「骨髓異形成症候群」（MDS）です。放射線を浴びることによって、私たちの生命の設計図である染色体に異常がおこり、長い年月の間に白血病を発症するのです。ヒロシマとナガサキでは六八年後も、被曝は進行中の問題なのです。原発は、「安全神話」を語るよりも、危険に誠実に対処してもらいたいと、川内原発で思いました。川内市を離れるとき、街の入口に、あたかも仁王門のように、道路の両側に、片方は「原発反対」、もう一つは「原発のあるまちづくり推進」の大きな立看板があり、仲よく並んでいるところがなかなか意味深長でした。

写真は、川内の美しい山村風景、川内原発の外観、展示館のなか、そして、反対と賛成の立看板です。原発推進の看板の下に大量の電気を消費する自動販売機を二台設置してあるところは、演出が心憎いほど細かいと思いました。

水俣病

川内から、美しい海沿いを北上し、熊本県水俣市へ行きました。現在も、水俣駅前にも、メチル水銀を含んだ汚染水を水俣湾に垂れ流したチツソ株式会社があります。

水俣はチツソの企業城下町です。ゲンパツ（三・一一）へと続く、企業による公害、環境汚染の原点は遠くは足尾銅毒事件、近くは水俣病だと言われています。八月に入ると、福島第一原発の汚染水の海洋漏出がにわかに関題になったのも、似ています。かつて、私は、水俣病に侵された魚を食べた猫が発症し、苦痛のあまり飛びはねるTV映像を見たときの衝撃を忘れることはできません。

水俣病に侵された人びとの苦痛を目にしながら、チツソは原因とされた工場排水を一〇年以上も海へと垂れ流しました。それを、戦後の経済成長を優先させた国や熊本県をはじめ、行政は黙認してきたのです。このときの惨状は、石牟礼道子さんの名著『苦海浄土』（一九六九）に記されています。経済成長を対立軸に、市民と患者は対立し、市民は患者を見捨てるという深刻な状況がくり広げられ、「市民の世論に殺される」と患者は悲鳴をあげたのでした。

このような悲劇は、今日の「三・一一フクシマ」にも、見られるのではないのでしょうか。仄聞するところによると、福島県いわき市では、市民と避難民との間に対立が生まれているとかがついています。

私たちは、現在、水俣病資料館語り部の会々長緒方正実さん（五八歳）と会いました。きっかけは読売新聞四月二三日の記事「国策が招いた患者差別」（緒方正実）を読んだからです。

緒方正実さんは次のように述べています。

緒方家の一族には患者や未認定の被害者が二〇人以上いて、水俣病の苦しみをまともに引き受けてきた。祖父は劇症型の水俣病で命を奪われ、重い障害を持って生まれた妹は原因物質のメチル水銀を生まれる前に摂取した胎児

性患者と診断された。近所では「奇病」「伝染病」とうわさされ、網元で大勢が集まっていた家なのに一瞬にして誰も近づかなくなった。私も小さい頃から転びやすく、骨折も治りにくかった。水俣病だと思っていたが、気付かれたら周りからいひどい扱いを受けると思い、隠していた。

緒方さんの転機は一九九五年の政治決着の時でした。緒方さんは認定申請しましたが、無情にも却下されたのです。却下の知らせを受けて、緒方さんの生き方は大きく変わり次のように述べています。

人生が変わった。一九六〇年の熊本県の調査で、私の毛髪水銀値は家族で一番高い二二六μだったのに救済されず、行政とは何なのかと怒りを感じた。水俣病から逃げていた自分への反省もあり、その後は患者認定を求め、七年から申請を繰り返した。四回目の申請が棄却され、行政不服審査を求めた結果、二〇〇七年に認定を受けた。

緒方さんの御自宅に伺ったとき、チツツと行政への怒りと不信の声が機関銃の弾丸のように浴びせかけられるのではないかと私は身構えていました。しかし、ご先祖の祀られた仏壇の前で、緒方さんの口から出たことばは、全く意外なものでした。

私たちは一人の人間としての生き方を忘れてしまっているのではないかと、という問いかけを、水俣病を通じてしている。

ということばでした。私は九〇分にわたり、緒方さんの苦痛の人生をうかがいましたが、それが、この発言に結実したことに、感動する他ありませんでした。

そして、最後に緒方さんは

水俣病から、最終的には「祈り」という形に、わたしは、今、到達したところです。

と、述べられ、お別れするとき、緒方さんは自ら作られた、「こけし」を贈って下さいました。「こけし」には次のような説明文が付されていました。「水俣の祈り」と題が付けられています。

水俣病の被害に遭い、苦しみながら失われた人間、魚、鳥、すべての魂が宿っていると思われる、水俣湾埋め立て地にある、実生の森の木の枝で彫った「こけし」です。全ての失われた生命に祈りを捧げながら「命の大切さ」と、二度と水俣病のような悲劇が繰り返さないよう、願いを込めて彫り続けています。白木のままで、目や鼻や口を描いていないのは、未完成の意味です。受けとられたみなさまの思いの中で完成させてください。

緒方さんは、この「こけし」を、チツンの後藤俊吉会長、潮谷義子熊本県知事にも贈っているのです。

緒方さんと別れたあと、美しい八代海（不知火海）に面した水俣病犠牲者の慰霊碑や実生の森のある公園へお参りに行きました。「こけし」が生まれる森の樹々は風に揺れていました。

水俣から東京に戻り、しばらくして、「水俣病の救済策 対象外四人提訴 熊本地裁」という新聞記事がありました（朝日新聞六月二日）ミナマタの悲劇は終わっていませんが、緒方さんの「祈り」が達成されることを、私もまた祈りたいと思います。

写真は、美しい八代海、緒方正実さんのその日（六月二日）の様子、緒方家水俣病被害家系図、水俣の海、実生の森、水俣病慰霊碑、チツソ株式会社です。

一、一六七回目のデモー祝島

梅雨が早々と明け、全国各地で三五℃の猛暑が記録された七月八日、山口県祝島^{いわいしま}へ行きました。広島駅からJR山陽線に乗り、柳井港に着き、そこから船で一時間、瀬戸内海の西の端、周防灘にうかぶ祝島に渡りました。

中国電力は、この祝島の対岸に上関原子力発電所^{かみのせき}を建設しようとしているのです。漁業に生きる島民は建設に反対して、毎週月曜日の夕方にデモをして、この日、七月八日が一、一六七回目のデモの日でした。デモを始めて三〇年が過ぎます。この三〇年で祝島の人口は半減し、現在、五〇〇人を切っています。

夕方、港に面した通りには、人びとが集まっていました。頭には「原発絶対反対」のハチマキ。年齢・性別はマチマチですが、パワフルなのは、三〇年間、デモをひっぱってきた、おばちゃんたちです。「男はつまらん、ケンカはおなごでなけりゃダメ」と考えているようです。

五〇人ばかり集まると、デモが始まりました。

祝島は「台風の島」と呼ばれ、風を避けるために家々は肩を寄せあうようにかたまっています。

「原発反対 エーイ エーイ オー」

「きれいな海と山を守ろう エーイ エーイ オー」

風から家を守る練堀に沿って狭い道が縦横に走っている。迷路のような路地をデモは進む。

デモは二〇分ほどで終り、その後、デモのリーダーの一人、「上関原発を立てさせない祝島 島民の会代表」清水敏保さんにお話をうかがいました。昭和三〇年（一九五五年）生まれの清水さんは五八歳、二〇代のおわり頃からデモをしています。昭和五八年、原発建設計画が発表された直後から反対運動が起こったのは、出稼ぎに行くことが多い島民の中には原発労働者もいて、原発の危険を当初から知っていたからです。

一九八五年の島民の声明文に、祝島島民の考えるゲンパツ問題の本質が示されています。

われわれは、原発と農・漁業、そして豊かな自然が絶対に共存できないと確信している。また、原発が、自然ばかりか人間の心までをむちゃくちゃにし、金のためには自分の生まれ育ったふるさとまで売りわたそうとする。錢ほいと「引用者注 錢を欲しがる人の意」をつくり出していくことを身をもってけいけんしてきた…（「原発をつくらせない人びと」祝島から未来へ 山秋真 岩波書店 二〇一二年）、と記されています。

ゲンパツ問題は、錢ほいと「お金を欲しがる人、グローバル資本主義とのたたかいです。グローバル資本主義の枠組の中にどっぷりとつかっている方の私としては、清水さんの話を聞くのはつらい気持ちでした。島で生活しなが

ら子どもたちを育てた清水さんの表情には疲れもうかび、少子高齢化がいちだんと進む祝島ではデモに参加する人々は年々減少し、参加者がいるあいだに原発建設計画が中止されることを、清水さんは心から願っていました。

写真は、祝島周辺の美しい瀬戸内海、原発建設予定地、祝島の港、反原発のうた、看板、デモの様子、清水さん、デモの道路使用許可申請書です。

「ピカドン」から六八年

「これがほんとうの地獄だと思いました」と、昭和二〇年八月六日に被爆した美甘進示さん（大正一五年生れ 八十九歳）は話し始められました。七月九日、祝島を出発して三時間後のことです。かたわらには、この会合をセツトして下さった美甘さんの菩提寺國前寺貫主疋田英親師が同席されました。

美甘さんは、思い出しながら、私たちに語ります。

この日、ぼくは（当時一九歳）、立ち退きが決まった上柳町（現上幟町）の自宅の瓦をはがそうとしていました。近所の人たちの朝のあいさつを交わす声がひびきいともと変わらない朝の光景でした。ピカッ！ その瞬間、閃光を感じ、ぼくは太陽の五倍ほどの火球を見たのです。

同時に、背中に、バケツ一杯の熱湯をかけられたような熱さを感じました。そして、しばらくたって、吹きとばされた家の下敷きになっていることに気がつきました。近くにいた父の手で助け出されたものの、着ていたシャツは燃え、右腕の皮膚はすべてはがれて腕からぶら下がり、腕の肉に付着したほこりは黄な粉餅のようでした。ズボンの右足側は燃えて、右の太ももは大やけどを負っていました…

八月六日の様子を語る美甘さんの話をうかがっているホテルのティールームからは、その後、美甘さん親子がさまよった國前寺から東照宮にかけての山が見え、発展した市街の風景が広がっていました。

お二人と別れて、平和公園へ行きました。広島市立高女原爆慰霊碑にお参りました。私には、この慰霊碑は被爆国でありながら「原子力の平和利用」を押しつけられた、残酷、かつ恥辱の象徴に見えます。そして、平和記念資料館に入りました。入館者の半数は外国人、若い男女がくいいるように展示物を見ていました。

ヒロシマにもいろいろな問題があるようです。

年間一、二八万人に上る来館者をもっとも注目するものの一つが、原爆で廃虚になった街をさまよう「被爆再現人形」だと思えますが、これは二〇一八年度の資料館全面改装では撤去されることが決まったようです。この被爆の真相を伝える被爆再現人形の撤去には反対の声が強いときいています。（毎日新聞八／七）

また、被爆六〇年の二〇〇五年から昨年までは手を組んで大会を開いてきた「連合」「原水禁国民会議」「核禁会議」が、「脱原発」と「原発推進」という路線対立から三者別々に大会を開くことになったことです。（中国新聞八／六）事実、中国電力のおひざもと広島では、祝島島民の上関原発建設問題にも関心が集まらないとうかがっています。また、国会議員の日本核武装検討派が急増との報道（毎日新聞八／六）もあります。〇九年衆院選時は当選者の七％それが昨年一二年衆院選では二九％に上っています。参院選では一〇年選挙の一八％から今年七月の選挙では二八％と伸びています。現時点での衆参議員の一／三に近い議員が「国際状況によっては核武装を検討すべきだ」と考えていることは注目しておくべきことです。また松江市教育委員会が『はだしのゲン』を閉架措置にしたことは、その方針は撤回されましたが、下村文科相が松江市教委の方針を支持したこととも併せて注目したいと思います。写真は、美甘さんとの懇談の様子、高女慰霊碑、原爆資料館、原爆投下後の市内、美甘さんの菩提寺復興した國前寺の仁王門と本堂です。

石橋湛山の「小日本主義」

二〇一三年正月、『サライ』という雑誌に作家井出孫六さんが、石橋湛山の「小日本主義」を紹介していました。

——今、「維新」という言葉がブームです。「危険な兆候」を感じますね。おそらく『大日本』に囚われている。戦前は「軍隊」によって、戦後は経済によって『大日本』を創り上げました。その宿痾から私たちは逃れられていないのですね。『大』にこだわるから隣国とも角突き合わせることになる。

——どんな考え方をすればよいでしょう。

かつて石橋湛山は『小日本主義』を唱えました。それに倣う必要があるんじゃないか。大を捨て小国として生きる。『大』にこだわるから、維新をやり直し、また大国を夢想してしまう。

私は、立正大学へ入学したときの学長でありながら、長く、湛山（一八八四～一九七三）の名を忘れていました。

湛山は父は杉田湛誓（日布）、母は石橋さん。望月日謙の薫陶を受け、戦前は経済批評を専門とするジャーナリストとして言論界、戦後は政界で活躍し、総理大臣に就任し、その後、長く立正大学長をつとめました。お墓が日暮里善性寺にあることを知り、望月兼雄住職にお墓へ案内していただきました。

湛山は「小日本主義」について、次のように述べています。

私は大正十年七月二十三日の『東洋経済新報』に

「一切を棄つるの覚悟―太平洋会議に対する我態度」と題する社説を掲げ、日本は「朝鮮、台湾、満州を棄てる、支那から手を引く、樺太も、シベリアもいらぬ。」これだけの大覚悟をもって、この会議に臨むのでなければ必ず失敗する。（『湛山回想』岩波文庫一九八五年）

当時、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦の戦勝国であったわが国をおおっていたのは「大日本主義」の風潮で

した。この風潮を象徴することは「八紘一字」です、半藤一利氏は『あの戦争と日本人』（文藝春秋 二〇一二年）の中で、このことばを造ったのは国柱会・田中智学であると推定しています。そして、智学の「八紘一字」の影響を受けたものとして、大正八年に国柱会に入会した石原莞爾、大正九年に入会した宮沢賢治の名を挙げ、石原についてはつぎのように述べています。

石原莞爾は、関東軍参謀として満州事変の作戦計画を立案し、成功に導いた人です。いわば昭和史をあらぬ方向へと動かした張本人ともいえます。有名となった「世界最終戦論」を発表して、昭和二十四年に没しました。：

石原は「私の世界最終戦争に対する考えはかくて、日蓮聖人によって示された世界統一のための大戦争」と、述べています。又、半藤さんは宮沢賢治の「世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」ということばは、「田中智学の言う『八紘一字』を賢治流に言い換えたもの」と考えています。

こうして、「大日本主義」⇔「八紘一字」の考えに押された日本は、昭和十一年の二・二六事件のあと、対外文書にはこれまで「日本帝国」「日本国皇帝」と記されてきたものを「大日本帝国」「大日本国天皇」と書き改め、ついに十年後の敗戦へと走り続けるのです。こういう状況の中で石橋湛山の唱えた「小日本主義」が、時代の風潮を批判した、いかにすばらしい考えであったかが、想像できると思います。と、同時に、現在の政府がさきの参院選でとなえた「とりもどす、日本」の日本が戦前の「八紘一字」⇔「大日本主義」への回帰であってほしくないと思います。

さて、始めに紹介した「日本の総人口の長期的トレンド」を思い出して下さい。今、急激な人口減少社会が始まっています。ピーク時の二〇〇四年の人口は一億二千七百万人、高齢化率一九・六％、そのときの出生率一・三五で推移したと仮定すると、二〇三〇年には一億一千五百万人、高齢化率三一・八％、二〇五〇年には九千五百万人、高齢化率三九・六％、二一〇〇年には中位推計で四千七百万人、高齢化率四〇・六％と推計されています。これは日本だけでなく世界の総人口は二〇四〇年には頭打ちとなり、その後減少に転ずるとみられています。

人口減少社会では、経済の成長拡大路線は必要でなく、石橋湛山のいう「小日本主義」がこれからの日本に、むしろふさわしいのではないでしょうか。そしてエネルギー政策も、それにともない、「原子力発電にたよらない持続可能なエネルギーによる社会の実現をめざす」ことが適切といえるでしょう。

一九七二年に『成長の限界』が出版され、各国で議論を巻き起こしました。このレポートの研究グループの一人、ヨルゲン・ランダースさんが少子高齢化の先頭を切る日本に期待して述べています。（毎日新聞 八月九日）

人口が減り、所得は横ばいという状況下で、いかにして人々の幸福感を向上させるか。日本は他国に先んじて直面しています。日本はこの問題に答えを出し、新しい社会像を作り出すリーダーになり得ると思います。

写真は、石橋家の菩提寺日暮里善性寺、湛山のお墓です。そして「日本の総人口の長期的トレンド」です。

香川県直島の「家」プロジェクト

では、このような時代を迎えて、どうしたらよいでしょう。

山崎正和氏は『大停滞の時代を超えて』（中公叢書）の中で、先行き不透明で閉塞感が漂う時代には、一夜のうちに現代を変えたいという「変革願望症候群」に駆られるといいます。しかし、カリスマ政治家に五年間希望をたくしても、政権交代に望みをかけても、現状が変わらなかつたことは、周知の通りです。そこで、著者は「大切なのは当面のさまざまな破綻を繕い、少しずつ微調整をしていくことである」といいます。（毎日新聞八月十一日書評）

さて、私はこの夏、八月八日に、瀬戸内海の島々を舞台に開催されている「瀬戸内国際芸術祭SETOUCHI TRIENNIALE 2013」へ行ってきました。もっとも、十ヶ所の会場のうち、その一つの直島なわしまへ行ったのです。直島は数年前にも行き、今回はその変化をたしかめたかったです。それと、この春、オープンしたANDO MUSEAMを訪れたかったです。

「セトウチトリエンナーレ二〇二三」のパンフには、開催意図が次のように記されています。

……今、世界のグローバル化・効率化・均質化の流れの中で、島々の人口は減少し、高齢化が進み、地域の活力の低下によって、島の固有性は失われつつあります。私たちは、美しい自然と人間が交錯し交響してきた瀬戸内の島々に活力を取り戻し、瀬戸内海が地球上のすべての地域の『希望の海』となることを目指し、瀬戸内国際芸術祭を開催します。

実行委員会会長は香川県知事浜田恵造氏、総合プロデューサーは福武財団理事長福武總一郎氏（かくだいすけいちろう）です。

この芸術祭の中心ともいえるべき直島では二〇数年前から福武財団と建築家安藤忠男氏が協力して美術プロジェクトを推進してきました。美術館とホテルを組み合わせたプロジェクトと、直島の旧市街、本村地区（ほんむら）で進められている「家」プロジェクトがありますが、私が注目しているのは、本村地区の「家」プロジェクトです。

安藤氏は東京大学での講義録『連戦連敗』（東京大学出版会二〇〇一年）の中で「家プロジェクト」について次のように述べています。

時代に取り残されたようなこの古い町の中に、現代アートのネットワークを組み込んでいく試みは、単なるアートプロジェクトとしての意味合いを超え、地域に新たな価値をもたらしつつあります。とありますが、この「家プロジェクト」によって地域が活気づけられるのに伴って、この旧びた町に新たに若者が惹きつけられて訪れるようになってきたからです。現代美術を一つの糧として、古い歴史的環境を現在に生かしながら、過疎化や高齢化といった問題を抱える地域の町村が生き残っていく。このような形での、まちづくり、環境再生へのアプローチもあるのです。

私が歩いた本村地区は「江戸から明治にかけての建物が数多く残り「杉の焼板で仕上げた黒ずんだ民家の佇まいが独特の風情を醸しだして」いましたが、これは住民の協力なくしてはできないことです。これらの民家の中に点在す

る民家を改装等した六つの作品を巡りましたが、注目すべきは著名な芸術家が仕上げた民家の中に、お寺とお宮が一つずつまじっていたことです。街には心のよりどころが必要であることを承知しているのです。多勢の人びとが訪れることによって街が美しくなり、活気が出るのは、心おどることです。とくに、芸術祭の最中でもあり、美術作品や建築をみるために、多くの外国人が来ていることも特質すべきことでしょう。

安藤さんは「長期にわたって継続的に取り組んでこそ可能な場所づくりがある」あるいは「環境プロデューサーとしての役割こそ、もしかすると次の時代の建築家の職能として求められるもの」と述べてますが、このことばは本阿弥光悦の鷹ヶ峰芸術村を思い起こすまでもなく、「立止安国」という、いわば私たちが生きている場所づくり、環境づくりを目標とする私たち日蓮宗教師に投げかけられていることばでもあると、理解したいと思います。